

耳の日に寄せて



ハートライフ病院 赤澤 幸則

沖縄県医師会会員の皆様、こんにちは。コロナとインフルエンザが同時流行する中、日々の診療にご苦労されているかと思います。

いきなりですが、3月3日は何の日でしょう？多くの方が、『ひな祭り！』とおっしゃると思います。その通りです。しかし、我々耳鼻科医にとって、3月3日は誰が何と言おうと『耳の日』なんです。なぜ3月3日が？日本人であれば、「3(ミ)3(ミ)」という語呂合わせが頭に浮かぶかと思います。また、耳の形が「3」に似ているとも言えます。

ただし、それだけではありません。3月3日は、電話の発明者であり聾教育者であったアレクサンダー・グラハム・ベルの誕生日でもあります。さらに、彼はヘレン・ケラーとアン・サリヴァンを引き合わせた人物ですが、この2人が出会ったのも3月3日です。そういった偶然もあってか、この日はWHOにおいても『国際耳の日』と2007年に宣言されています。

遡る事50年ほど前、すでに日本では、『耳の日』は難聴と言語障害をもつ人々の悩みを少しでも解決したいという、社会福祉への願いから始められており、日本耳鼻咽喉科学会（現在、日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会）の提案により、昭和31年に制定されました。日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会では、毎年「耳の日」に、都道府県ごとに、難聴で悩んでいる方々の相談や、一般の人々にも耳の病気のことや、健康な耳の大切さを知って頂くための活動を行っています。

沖縄県でも昨年、コロナ禍になって3年ぶりに市民講座が再開されました。今年も3月19日（日曜日）に沖縄県立博物館にて行われる予

定です。昨年より『耳鼻咽喉科月間』として、耳だけでなく、鼻、咽喉頭、頭頸部領域の各専門医による教育講演があり、また補聴器の展示や医療相談なども行ってまいります。医師会の先生方におかれましては、難聴に関心のある患者さんにご案内頂きますと幸いです。（昨年のポスターを添付致します。）

せっかくの機会を頂きましたので、少し難聴の現況についてご説明させていただきます。先天性難聴は出生1,000人あたり1～2名に両側難聴をきたすとされ、他の先天性疾患に比べても高頻度です。そのままであると言語発達に大きく

耳鼻咽喉科月間 市民公開講座 入場無料

“耳・鼻・のど”の病気と治療を学ぶ

日時： **2022年3月6日（日）** 13:00～16:00

場所： **沖縄県立博物館・美術館**
那覇市おもろまち3丁目1番1号 TEL/098-941-8200 先着20名

内容： **みみ・はな・のど・くちの相談会** 13:00～
講演会…………… **14:00～15:20【開場13:45】**
情報保障：手話通訳 要約筆記 磁気テープ
補聴器展示…………… **13:00～15:45**

新型コロナウイルス感染予防と参加者の安全確保のため**先着50名**といたします。
当日はマスク着用のうえ、会場内での飲食や会話はお控えください。
今後の沖縄県コロナ警戒レベルによっては中止となる場合がございます。

プログラム

1. 治りにくい副鼻腔炎について
山下 懐（こころ耳鼻咽喉科）…………… **14:05～14:25**
2. 健康長寿は耳から～聞こえと健康の関係～
比嘉 輝之（琉球大学病院）…………… **14:25～14:45**
3. 口とのどにできるがんについて～早期発見・早期治療が大切！～
金城 秀俊（琉球大学病院）…………… **14:45～15:05**
4. いつまでも楽しく食べるため～摂食・嚥下(飲みこみ)について学ぼう～
喜瀬 兼基（琉球大学病院）…………… **15:05～15:25**

~~~~~ Q & A (10分) ~~~~~

主催：日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会沖縄県地方分会（琉球大学医学部 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座内）  
〒903-0215 西原町字上原207番地 Tel: 098-895-1183 Fax: 098-895-1428 HP: <http://www.ent-ryukyujp>

2022年3月講演会ポスター

影響し、その後の社会生活にも大きな制限がかかることとなります。そのため、早期発見し必要な方には補聴器や人工内耳を早期に装用開始することが大変重要で、それを可能とする新生児聴覚スクリーニング検査の重要性が以前より指摘されております。ただし、その費用が全て自己負担のため、その普及の妨げとなっております。財政支援によって徐々に公費負担の動きはあるも、令和元年で全国市町村の公費負担の実施状況は52.6%とまだまだ十分ではありません(ちなみに沖縄県で公費負担を行っている市町村は、令和2年で41市町村のうち6市町村ときわめて少ない状況です。)

しかし、2019年に難聴対策推進議員連盟が立ち上がり、Japan Hearing Visionとして政府へ要望していくなど、近年難聴への関心が政治的にも高まっております。令和4年度には、新生児聴覚スクリーニング検査の公費負担の実態を踏まえ、これまで少子化対策に関係する経費の内数としての算定から、保健衛生費における算定に変更し、『新生児聴覚検査費』として市町村の標準団体(人口10万人)当たり935千円が計上されました。これは、各市町村で公費負担状況が大きく異なる現状から、改善する事を大いに期待させる変化かと思われまます。

沖縄県では、産婦人科、小児科を始めとした医師会の先生方、療育機関や教育機関など難聴

に関わる皆様と連携・情報共有して難聴児を途中で途切れることなくサポートしていくべく、その中核センターとして『きこえの支援センター』が琉球大学病院内に令和2年に開設しております。是非一度ホームページをご参照下さい。

また、老人性/加齢性難聴に関しても、2017年にLancetで『難聴は、予防可能な要因の中で、認知症の最大の危険因子である』として指摘され、難聴と認知症との関係が社会的にも大きく注目されるようになっております。適切な補聴器を適切なタイミングで装用頂くことが重要ですが、通販で容易に手に入る集音器を購入し、効果がないのですぐにあきらめてしまう方が多いです。実際は、補聴器は付けたらすぐ効果があるわけではなく、聴覚リハビリを行う期間が3か月程度必要です。患者さんには、「難聴になると音が脳に届きにくくなる。補聴器は音を大きくしてくれるが、急に大きな音が入ると『難聴の脳』は不快に感じる。それでも、少しずつ音を大きくして脳を音に慣れさせていくと『聞こえる脳』に戻ってくる。補聴器を付けたら外したりしているとこの変化が起こらない。」という事を理解して頂くことが重要です。

医師会の先生方も、患者さんに難聴を疑う方がいた際は、「3月3日は何の日ですか?」と尋ねて耳鼻科受診を勧めて頂ければ幸いです。

